

電子オルガン “Ringway” 最新情報

～中国がアツらしい～

楠田 しおり
(調査協力 入谷 麻友)

最近、中国で生まれた新しい電子オルガンが目覚ましい進歩と発展を続けている。

2005 年に“吟飞(Ringway)”という電子楽器を扱う企業によって、初の中国製電子オルガンが発売されたが、その後、演奏者のニーズを積極的に取り入れながら改良が重ねられ、今夏には新機種が発売された。専用の音楽教室も開講され、現在では中国の音楽大学での教育にも取り入れられている。

また国際的なコンペティションも各地で開催されており、今後中国を中心とした新しい電子オルガンの活用が広がっていくことが期待される。

筆者は、APEKA(アジア・パシフィック電子キーボード協議会)を中心としたアジア交流活動に数年前から参加しているが、今後のひとつのキーワードとなり得る中国製電子オルガンについて情報収集を行うべく、Ringway 社事務所のある上海に赴いた。

【Ⅰ. Ringway 社製電子オルガンの特徴】

現在、電子オルガンは RS400、RS500、RS700、RS1000、RS1000E の 5 種類があり、教育用から演奏用まで様々な用途で利用されている。

姿形や音色は日本製の電子オルガンに酷似しているが、大きな特徴の一つは MIDI や MP3 と連動していることで、音色のデータや録音した演奏をすぐに電子オルガン上で MIDI や MP3 のファイルに変換することができる。

また上位機種である RS1000 と RS1000E は、上鍵盤と下鍵盤共に 61 鍵、足鍵盤が 25 鍵、音色数が約 400 とヤマハの STAGEA プロフェッショナルモデルに匹敵する機能を搭載しているが、価格は日本円に換算して 30 万円程度と安価である。そのため、中国では幅広い層から人気を集めている。

筆者が上海にある Ringway 本社で試弾したのは、

RS700、RS1000、RS1000E であるが、特に 2015 年(今年)に発売された最新機種の RS1000E は音色の質が格段に進歩したことで中国内の指導者から注目が集まっており、筆者もその音色の違いに大変感銘を受けた。

機能面では、タッチトーンやリバーブなどの詳細設定が可能のため、日本製電子オルガンに慣れた奏者でも違和感無く操作や演奏ができるのではないだろうか。

また、全機種において中国の民族楽器の音色が多く入っていることも特徴の一つである。中国人の演奏者や学習者が民族楽器の音色を多用する傾向にあるため、Ringway 社がそのニーズを汲み取っているのだ。

日本では未だこの電子オルガンは販売されていないが、ヨーロッパと南アメリカの数カ国では既に販売されている。



図 1 最新機種の RS1000E



図 2 教材例

【Ⅱ. 出版されている教材】

教材や楽譜は主に、“上海音乐出版社”から出版されており、2014 年度には 14 冊の新譜が出された。

ジャンルはクラシック、ポップス、童謡、中国民謡など様々であるが、日本の映画音楽やバンドの作品集も多く出版されている。

また、エチュードのような曲集も数種類出版されており、指のテクニックやベース奏法を習得するためのオリジナル曲が豊富に盛り込まれている。現在このような曲集の編曲や作曲、監修は、上海音楽学院の朱磊教授を中心に行われている。

これらの電子オルガン曲集においては、1 級から 10 級までのレベル設定がされており、10 級が最高難度となっている。しかし、このレベル設定はあくまで参考程度で、現在のところ検定試験などは実施されていない。

【Ⅲ. コンペティション】

Ringway 電子オルガン専門のコンペティションとして一番有名なのは、“Ringway International E-organ Competition”である。2008 年の第一回大会から隔年開催され、2016 年には第五回大会が予定されている。

このコンペティションでは年齢やジャンル別に部門が設定されており、参加者は以下の 4 つの部門で分けられる。

- ・ Child Group : 12 歳以下の部門
 - ・ Teenager Group : 13 歳～17 歳の部門
 - ・ Adult GroupA : 18 歳以上のポピュラー音楽部門
 - ・ Adult GroupB : 18 歳以上のクラシック音楽部門
- ※この他にも、オルガン曲を電子タイプのパイプオルガンで演奏する古典部門が別に設定されている。

決勝大会に先立ち、中国国内 4 箇所での地区予選が開かれるが、全地区を合わせると毎回 500 名程度の参加者が集まるという。

決勝大会は更に 1st Round と 2nd Round があり、1st Round では課題曲 1 曲と 8 分以内の自由曲 1 曲を演奏し、2nd Round ではモチーフ即興演奏と 8 分以内の自由曲 1 曲が課される。

審査員は中国人だけでなく、日本、マレーシア、イギリス、オランダ、ドイツなどの各国から集まっており、まさに国際的な大会となっている。また 2014 年度の課題曲には、審査員を務めた洗足音楽大学教授の佐々木昭雄氏による書き下ろし作品が使われた。

更に最近では、各地で様々なコンペティションが行われているようで、とりわけ今夏は国が主催する

“第一回全国吟飛電子オルガンコンペティション&コンサート”という大規模なイベントが江蘇常州で開催され話題を呼んでいる。



図 3 開幕コンサートの様子

このイベントの大まかな日程は以下の通りである。

- 1 日目：開幕コンサート、審査員会議
- 2 日目～1 週間：コンペティション
- 最終日：受賞者記念演奏会、閉幕式

開幕コンサートでは、電子オルガンとヴァイオリンのデュエット演奏や、上海音楽学院の学生によるバンド演奏、オペラ歌手や合唱とのコラボレーションなど様々なスタイルの演奏が行われた。もちろん使用されたのは全て Ringway 電子オルガンである。

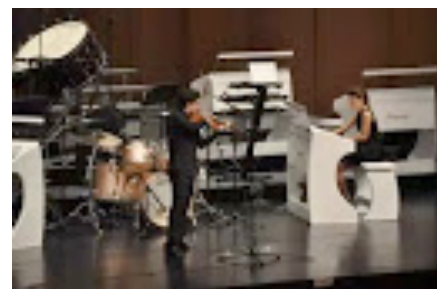


図 4 ヴァイオリンとのコラボ

その他にも、大学主催のコンペティションに Ringway 電子オルガンが使われるなど関心が高まっており、今後更に多くのコンペティションが開かれるであろう。

【Ⅳ. 音楽大学や音楽教室での教育】

音楽大学において、いち早く Ringway 電子オルガンを取り入れたのは上海音楽学院である。

同学には 6 台の RS1000 が入っており、また RS1000E も 2 台が教室に置かれていた。そしてコンペティションが開催されるようになった 2008 年からは、他の音楽大学でも積極的に取り入れる動きが

広まっており、現在は天津・武漢・西安・星海・四川の各音楽大学で Ringway 電子オルガンが使われている。

また音楽教室は、筆者が訪れた事務所に併設されている他、上海を中心とした各地に作られている。

これらの音楽教室では、個人レッスンとグループレッスンが開講されており、どのクラスも教材や楽曲、レッスン内容についての決められたメソッドは無く、自由度が高い。しかし今後は、専用教材を設定するなどシステム化が進められていくようである。



図 5 音楽教室のレッスン室

【V. 総括・今後の展望】

Ringway 電子オルガンが登場してから今日までの10年間で、楽器の質やそれを取り巻く環境が急速に発展し、非常に関心が高まっていることが明らかになった。そしてその背景には、演奏者や学習者のニーズを汲み取った素早いモデルチェンジや、大規模なコンペティションの開催などが反映されていると言える。

つまり、今後も中国製電子オルガンについての情報を知ることが、中国におけるニーズや流行りを掴むことに繋がるのではないだろうか。

更には近年、他社の参入も始まり、美德理(medeli)という新たな電子オルガンが発売されている。

これからも中国で展開される電子オルガンの動きから目が離せない。

参考資料

《楽譜》

吟飞艺术中心編『美妙的中外童謡』上海音乐出版社 2014 年

朱磊編『全国电子管風琴(双排鍵)考級作品集』上海音乐出版社 2014 年

《インタビュー》

佐藤昌弘(洗足学園音楽大学教授)面会インタビュー、2015 年 8 月 29 日

刘丹丹(吟飞艺术中心、音楽運営職員)面会インタビュー、2015 年 7 月 24 日

李樂友(大連大学講師)面会インタビュー、2015 年 8 月 21 日

Jonathan Moo(Dee music studio)メールインタビュー、2015 年 5 月

(電子オルガン活動家 くすだ しおり)